

“The Miracle” : 恋人捜しから自分探しへ

鶴川 雅江

倉敷芸術科学大学教養学部

(1998年9月30日 受理)

序

ユダヤ系アメリカ文学は、近年注目を集めている。アメリカで生まれた世代の作家もあるが、それぞれ多かれ少なかれユダヤの伝統を反映しており、他のマイノリティと並んで、多くの移民を構成員とするアメリカの姿を浮き彫りにする。ここで紹介する Anzia Yeziarska は、19世紀末に東欧からアメリカに渡った移民家族の一員である。女性に学問を認めぬ旧世界のユダヤの伝統によって、ユダヤ系の女性作家は輩出されにくい状況にあった。しかし、10歳前後に東欧を離れた Yeziarska は、アメリカで教育を受ける機会にも恵まれたうえ¹⁾、その奔放な性格も手伝って、表面的には伝統にとらわれない人生を送る。結婚までは親元にいる多くのユダヤ人女性たちとは異なり、10代で未婚のうちに保守的な父親の元を飛び出して以来²⁾、自らの夢を模索し続けたのである。その結果として、何回もの浮き沈みを経験しながらも、読者の共感を獲得する作品を残すこととなる。

日本ではあまり紹介されず、もちろん日本語の翻訳も存在しないこの作家は、どのような作風をもっており、その真価はどこにあるのだろうか。ここでは、自伝的要素の強い彼女の作品群の中でも、“The Miracle” を取り上げてこの短編を分析する。テキストに見られる特長、そしてユダヤ人の移民としての歴史的側面を見いだすことで、日本ではあまり知られない Yeziarska の魅力を明らかにしてゆきたい。

I テーマと構成

“The Miracle” というタイトルは、愛を渴望するポーランド在住のユダヤ人ヒロインが単身でアメリカに旅立ち、夢描いてきたまさに理想の恋人に出会うという奇跡に困んでいる。ポグロムの脅威も存在する東欧を逃れた後、ニューヨークの暗く狭いアパートでの搾取されるだけの生活をも抜け出したヒロインの姿は、作家 Yeziarska 自身と同様、移民たちの誰もが憧れるサクセスストーリーの主人公、あるいはシンデレラの典型で、テーマが分かりやすい。そこで表面的に読む読者には、メロドラマティックな恋愛物語に過ぎないと見なされるかも知れない。また冒頭部の回想を除けば、時の流れに逆らうことなく進むプロットもシンプルで、目新しいものとは言えない。しかしこの短編は本当に、貧しい女性の恋愛成就を描くだけのシンデレラストーリーなのだろうか。

わずか10ページ足らずのこの短編は、その舞台を旧世界ポーランドと、アメリカの両方に置く。そしてアメリカの生活は、ニューヨークの移民街や搾取工場といった暗い側面と、それとは対照的な希望に満ちた学校という舞台に二分されている。つまり、大きく分けると旧世界、アメリカでの旧世界から新世界への脱出あるいは過渡期、そしてようやくたどり着いた新世界の3部構成となっているのである。だが、分量的な割合を見ると渡米以前のポーランドの描写が、アメリカでのストーリーの2倍を占めており、後半のプロットが展開を急いでいるような印象を否めない。テキストの規模の小ささから判断すると、バランスの取れた構成とはいえないだろう。このような構成にも、何か要因となることが隠されているのだろうか。

このようにテーマや構成に、一見明確な特長や評価対象が見当たらないこのテキストでも、この短編が *Yeziarska* にとってのターニングポイントなるほど³⁾、読者を共感させている。その理由は、どのようなところにあるのか。それを探るべく、実際に1章ずつを用いて旧世界、過渡期、新世界のシーンを順を追って分析していく。またそれぞれの章では、*Yeziarska* のユダヤ人としての側面も併せて述べることにする。

II 旧世界

ヒロイン Sara Reisel の一人称で語られる “The Miracle” は、“Like all people who have nothing, I lived on dreams.” (50)⁴⁾と、夢を糧にして暮らしていたという語り手の回想で始まる。著者 *Yeziarska* は、“I never know the end of a story when I begin.”⁵⁾と、自分の執筆が無計画であるかのような発言をしたり、作品内の感情の激しさを抑制するようしばしば促されたりした⁶⁾。それにどのテキストにも一見すると、感情の赴くままに一気に書き下ろされたかのような勢いがある。しかし、先程の冒頭やそれに続く “And what happened to me when I became an American is more than I can picture before my eyes, even in a dream.” (50)、私がアメリカ人になったときという述懐からは、既に Sara がアメリカ人になった結末が明らかになり、その設定が予めなされていたことが分かる。*Yeziarska* はユダヤのイデッシュ語を母語とし、渡米した10歳前後まで使用していたため、第二言語での執筆に大変な困難を伴い⁷⁾、常に相当の推敲を重ねていたという⁸⁾。*Yeziarska* の創作への姿勢はかなり真摯で、その激しい感情表現も実は綿密に練られたもので、衝動的に取り組まれたものではないことを認識しておく必要がある。

さて、Sara Reisel は結婚適齢期を過ぎた夢見る女性であり⁹⁾、その夢とは主に恋愛への憧れで占められている。彼女のように貧しい家族の出で、結婚に際して父親から持参金を持たせてもらえぬ女性は、相手の条件を問うことができない。それに通常はその結婚相手も、父親の一存で決められる。*Yeziarska* の長編 *Bread Givers* ではヒロインが、先妻との間にたくさんの子供がある男やもめや、詐欺師まがいの夫の元へ父親の命令で姉たちが無理やり嫁がされる不条理を、妹の視線でみつめ描いている¹⁰⁾。Sara は幸運にもそのような独

裁的な父を持たないが、持参金なしでも自分の夫の候補になりそうな男性たちのひどさに打ちひしがれ、“Why was I born? What is the use of dragging on day after day, *wasting myself eating, sleeping, dressing?* What is the meaning of anything without love?” (51) (イタリック筆者)と自問する。このことばから推察されるように、Saraは単に恋愛に憧れる子供じみた態度を免れている。恋愛をただ虚栄心が満たされることや、快樂に求めるのではなく、自らの人生の意味にまで押し広げているのである。熱情の裏にある向上心・探究心が、Saraの激しい想いに読者を共感させる一因であり、この短編をより彩っているのである。

そんなSaraの家に、渡米した女性Hanneh Hayyehがその母によこした婚約報告の手紙が持ち込まれる。19世紀末当時のユダヤ人たちの小さな村シュテトル（このテキストではSavel）での情報源といえば、こういった手紙のような心もとないものしか存在しない。唯一文字を読むことのできるSaraの父親のもとへ村人は押し寄せ、差出人の書き記した一言一句を逃さぬよう耳を傾け、そのうえすべてを信じ込んでしまうのである。この種の便りが、自慢話やほらを全く含んでいないという保証はなく、Yeziarskaの他の短編でもアメリカからの朗報に飛びつく人々の姿が、ユーモアとペースをこめて描かれている¹³⁾。SaraもそんなHannehの手紙の話を鵜呑みにし、アメリカという未知の世界と、そこで待っていてくれるであろうまだ見ぬ恋人への想いを次第に深めていく。そしてついには、眠りにつくことも“*One night I could not fall asleep.*” (52)、食べることも“*I couldn't taste nothing [sic].*” (52) ままならなくなるのである。彼女のこの状態は、前出の引用イタリック部分の、食べることや寝ることに自らを無駄にしているとの嘆きに呼応している。つまり、ここでSaraの行動や発言に、彼女なりの一貫性があることが読み取れるのである。一見無分別で感情的なSaraに、彼女自身の論理があることを念頭に置けば、“*‘Eat?’ I cried, jumping up like one mad. ‘How can I eat? How can I sleep?’*” (52) という記述にも納得がいき、理解が可能なのである。

Saraは早速、家族に渡米の計画を持ち出す。しかし、はじめは父親に“*Are there miracles in America?*” (53)と問われ、反対されてしまう。この父親の問いかけも、語り手がイタリック体に行っていることから、冒頭部同様、この短編の結末を匂わせる暗示的な箇所である。父親の予想に反して、奇跡は実際に起こるのである。Saraは利己的にも見える理屈で両親を説き伏せようとし、最後には、“*I can do a million times better than Hanneh Hayyeh. I got a head. I got brains. I feel I can marry myself to the greatest man in America.*” (53)と叫んで自信を覗かせている。高慢なことばかも知れないが、村で唯一文字が読める教師を父親に持ち、人生の意味に広く思いを馳せる彼女が、自らの知性に自負心を抱くのも頷けることであろう。

結局家宝を質に入れ、アメリカ行きの切符を手に入れたSaraは新世界へと旅立つ。その家宝とはユダヤ教徒として代々受け継がれてきた、Saifer Torah¹²⁾と安息日用の銀の燭台である。父母はそれぞれの宝物を“*my [Sara's father] life, from generation and generation.*”

(53), “It’s like a piece from my [Sara’s mother] flesh.” (53), と自らの命や肉になぞらえて言うが, それらを娘のために泣く泣く手放すことにする。Saraの父親は, 他の *Yeziarska* 作品によく描かれる作家自身の父親を投影した人物とは異なって, 娘に理解を示し自己犠牲的な側面を見せる。この Sara の父親の行動は, 結末のものよりは規模が小さいものの, ユダヤ教の伝統を何よりも重んじる父親を持った *Yeziarska* にとっては, ある種の小さな奇跡と呼べるものである。ようやく実現にこぎつけた, このヒロインの安い切符でのアメリカへの航海は, 快適なものではなかったと予想される¹³⁾。だが Sara の瞳には, “I didn’t see the ocean. I didn’t see the sky. I only saw my lover in America. . . .” (55) と希望に満ちた未来以外は何も映らず; わずか6行からなる1パラグラフ後には, 彼女は無事アメリカに到着するのである。旧世界での Sara はアメリカに渡りたい, 恋人に会いたいという望みをただ闇雲に主張するばかりである。彼女の考え方には, 人生への問いなど知性の萌芽も見られるが, 家族を犠牲にすることを承知でも我を通そうとする, 利己的な側面も否定できない。このあと Sara がどのように変化していくかが, 注目すべき点である。

Ⅲ 移民街の現実

いざ夢のアメリカに来てみるとそこでの生活は, ポーランドよりももっと惨めなものだと判明する。前に, この部分を旧世界から新世界の脱出・過渡期と表現したが, Sara はもちろん物理的には既に新世界アメリカの地に到着している。しかし彼女の考えていた希望に満ちた新世界は, アメリカにたどり着いた時点ではなく, もう少し後にならないと開けては来ないので, ここでは定義が若干ずれることを断っておく。貧民街や搾取工場はユダヤ人ばかりで, アメリカの中の小さな旧世界に過ぎないのである。

シャツ工場で10時間も働く Sara は, その少ない給料で自分を養うだけでなく, その一部を犠牲になってくれた家族の元へ送らねばならず, 暗く孤独な下宿と工場の往復で毎日を終える。それでも, 仕事を得られただけまだましである。Sara が歩く通りは, 手押し車を押して商売する行商人で溢れており (56), Sara がアメリカにたどり着いた頃の描写は特に, 当時の移民街の様子が伝わる歴史的にも興味深い箇所である。“Is this ‘lovers’ land’?” (55) と叫ぶ Sara の心は, 渡航前に様々な幸福な想像を巡らせていただけに痛々しく, 移民の現実を物語ってもいるのである。

そんなわけで, Hanneh の手紙の “In America millionaires fall in love with poorest girls. Matchmakers are out of style. . . .” (51) との報告も, Sara には全く該当しない。そこで彼女は, まさにその時代遅れの結婚仲介人 Mr. Zaretsky のもとを訪ねることにする。東欧のユダヤ人社会には, 近年まで男女の仲をとりもつ仲人が存在したのである¹⁴⁾。Yeziarska の従来の保守的な父親像は, Sara 自身の父親よりもこの Zaretsky の方に, より色濃く見いだせる。結婚適齢期を過ぎた Sara に Zaretsky は, “There are plenty of young girls with money that are begging themselves the men to take them. So what can you [Sara] expect? Not young, not lively,

and without money, too?” (57) とまで言う。このことばをきっかけにヒロインは、アメリカにある小さな旧世界から、新世界への飛躍を果たすこととなる。Sara はいつまでもそれを頭から追いつけないが、後に “You are younger than youth” (60) と言われるまでになるのである。Sara はポーランドでは自分の力で男性を見つけると豪語していたものの、アメリカでの現実に落胆し本来の自分を見失っていた。しかし Zaretsky のおかげでついに、 “American girls don't go to matchmakers.” (57), 新世界には仲人など必要ないと気づかされるのである。

Sara はアメリカに憧れ、やっとの思いでたどり着いたものの、その現実に打ちひしがれ、わらをもつかむ思いで旧世界の慣習に思わずすがりつく。しかしその失敗への自己反省が、本当に新しい世界へのステップへと彼女を導くのである。この試練の時は、適齢期を過ぎたとはいえまだ未熟なヒロインを成長させる。 “Make a person of yourself.” (57) と自分に言い聞かせ立ち直ろうとする彼女は、もはや恋人探しだけを目的としていた Sara ではない。歴史的にも、作家のユダヤ人の側面が垣間見られる点でも、価値のあるこの過渡期の描写は、また内容面でも重要な部分であるといえよう。ヒロインの苦悩と奮闘のおかげで、単なるラブストーリーではない教養小説的な短編へと昇華されるからである。

IV 新世界

Zaretsky から受けた屈辱とそれに対する抵抗から、Sara は学校で英語を学んでアメリカ人らしくなることを決意する。そして彼女はこれまで切望していた “love” の概念が、ひどく偏狭であったことを悟り、その訪れをただ指をくわえて待つのではなく、周囲の人、殊にかつての Sara のように打ちひしがれた人にこそ、愛を与えるべきであると気づく。経験を通して、恋人を捜す目的が、自らを探究する方向へと移行し転換していく。利己的な態度を伴っていたかつての Sara は環境を憂い、外に批判を向けてばかりいた。しかし、ここに来て、他に依存するのではなく内的に自らを充実させることを目指すようになる。

そのように成長を遂げ考えを深めた Sara の、学校での生活の充実は想像に難くない。またそこには、好都合にも理想の男性である教師が待っているのである。これまで Sara が恋愛に憧れ夢描いていた理想は、具体性に欠けかなり漠然としたものであった。その理想が、この非ユダヤ人教師の登場で具現するのである。アメリカ人としての保守的な伝統の束縛を感じているこの教師は、 “I am bound by formal education and conventional traditions. Though you work in a shop, you are really freer than I.” (59) と発言し、Sara が抑圧的な伝統から既に解放された、自由な存在であることを見抜き尊重する。Poland の旧世界にいた視野の狭い Sara が、旧世界を離れその伝統的な世界から一步を踏み出したことは、決して伝統を忘れてしまうことを意味するのではなく、新しい世界を受け入れる柔軟さを身につけることにつながるのである。一見自由に見えたアメリカ人教師が未だ達成できないで

いる自らの狭い世界からの脱出を、Saraは既に経験している。この教師との恋愛は、苦境のなかでもがくヒロインを同情して救う、白馬の王子の訪れといった種の奇跡ではない。彼女が尊敬し崇拜の念を持つ男性と対等に、人間として尊重しあえるほどにSaraが成長したことに起因するのであり、言わば“必然”とも考えられるのである。

Yeziarskaの実娘 Louise Levitas Heriksenによる、伝記でも指摘されているように、この恋人と出会い結ばれるシーンは、この短編で最も自伝的要素の強い部分と考えられる¹⁵⁾。2度の結婚の失敗の後に現れたJohn Deweyの影響は、Yeziarskaにとって多大であった。WASPで年齢の離れたDeweyを父親のように慕いながらも¹⁶⁾、自分の意見を主張もする¹⁷⁾、そんな対等な関係は、この教師とSaraと同種のものである。この短編執筆の前におきた思いがけないDeweyとの別れはつらいもので¹⁸⁾、Yeziarska自身その面影を振り払うことができなかったのであろう。彼の実際のことばや手紙の一節が、そのまま引用されていると考えられる箇所も存在している。Yeziarskaの自伝的物語には、John Morrowと仮名を与えられているDeweyから、語り手=Yeziarskaへの手紙に“You are fire, water, sunshine and desire.”¹⁹⁾という文章がある。その文が“water”を削除しただけで、Saraのアメリカ人教師のことばとして、この短編の中でも使用されているのである(60)。それは作家の当時の情熱や想いがそのまま再現される点で、伝記的資料としては貴重である。しかしその行為は、文学を志して通常は真摯にまた貪欲に創作に取り組み、逆境や苦勞も厭わなかったYeziarskaの弱みを示し、作家としての自覚と認識を疑わしくするものである。前に後半のプロット展開の早さを指摘したが、Yeziarska本人がSaraに成り代わり、語り手の座を奪ってしまったこのシーンを、すばやく締めくくったことは、賢明であったかも知れない。Saraが語る奮闘ぶりに耳を傾けていた読者は、突然著者が顔を出し自らの恋愛体験とSaraの物語と混同してしまうのには、当惑せずにはいられないからである。

以上のように見てくると、このテキストの重要な部分は、むしろヒロインの新しい世界への飛躍と成長にあることが明らかになる。中心テーマのように見えるラブストーリーは、実はSaraの成長ぶりを示すひとつの証し、あるいはYeziarskaの個人的なDeweyへの思い入れと願望のあらわれに過ぎないのである。構成上無理があるようにも思われた新世界のプロット展開の早さは、実はそのようなテーマの重みを加味すると、妥当であるとも考えられるのである。

むすび

一見単純なこの短編には実は、旧世界でのユダヤ人の暮らしや伝統、夢を求めてアメリカに渡った移民の歴史的側面、そして作家Yeziarskaの伝記的事実が含まれている。そしてプロットを中心では、Sara Reiselがポーランドから単身アメリカに渡り、厳しい現実を目の当たりにしたものの、着実に道を切り開いて行く姿が描かれる。その情熱的な性格は知性に支えられたものであったが、未熟で利己的な側面を含んでいた。しかし、Saraは伝

統的な旧世界からアメリカにある小さな旧世界を経て、新たな世界に遭遇する過程で、自己を顧みる機会を得る。この新しいタイプのユダヤ人女性像は、時代や場所、文化を異にする読者にも身近に感じずにはおれないものに仕上がっている。そして、恋人・夫捜しの当初の目的が Sara の自分探しの旅となる過程は、読者の共感を呼ぶのである。

この短編は、Yeziarska 作品を代表する名作とは言い難い。しかし、そのさまざまなエッセンスを凝縮させている点で、意味深いテキストであることは疑いのない事実である。一見すると単純なラブストーリーだが、実はヒロインの不屈の精神とその成長を描いている。表題の奇跡は、ただ受動的に与えられたものではない。それはさまざまな試行錯誤を重ねて、ヒロインが自分のものとするのができた、新世界そのものなのである。

Notes

- 1) Louise Levitas Henriksen, *Anzia Yeziarska A Writer's Life* (New Brunswick: Rutgers U. P., 1988), 14.
- 2) Henriksen, 17.
- 3) Henriksen, 123.
- 4) Anzia Yeziarska, *How I Found America* (New York: Persea Books, 1991).
 “The Miracle” の引用はこの版により、引用のあとの括弧はそのページ数を示す。
- 5) Anzia Yeziarska, *Red Ribbon on a White Horse* (New York: Persea Books, 1987), 72.
- 6) *Red Ribbon on a White Horse*, 78.
- 7) Henriksen, 130.
- 8) Henriksen, 202-03.
- 9) ほぼ同時期の東欧ユダヤ人の結婚観には、次のような記述があり、かなり低年齢を結婚適齢期としている。
 Children were sometimes betrothed at birth, married off before puberty, and then became parents as soon as it was physically possible. Jews felt that early child bearing was good for the health of the community.
 Isaac Bashevis Singer (as Yitskhok Bashevis Zinger), “*Di mishpokhe*,” (Serialized in the *Forverts*) (March 12, 1982), 8.
 Janet Hadda, *Isaac Bashevis Singer: a life* (New York: Oxford U. P., 1997), 24. からの孫引き。
 また、タルムード（モーセ五書トラーの注釈書）では18歳とされる。
 滝川義人, 『ユダヤを知る事典』(東京:東京堂出版, 1994), 211.
- 10) Anzia Yeziarska, *Bread Givers* (New York: Persea Books, 1975).
- 11) Anzia Yeziarska, *How I Found America* (New York: Persea Books, 1991) “How I found America”, 114.
- 12) Saifer Torah (Sefer Torah): The scroll containing the Five Books of Moses that is kept in the Ark at the front of a synagogue or temple.
 ユダヤ教の信仰には欠くことのできない旧約聖書の最重要部であり、Sara の父親の譬えは決して大袈裟な表現ではない。
 Leo Rosten, *The Joys of Yiddish* (Harmondsworth: Penguin, 1968), 320.
- 13) 30余年後に再び三等船室を体験した Yeziarska の様子が、次のように記されている。
 Anzia could not overcome her revulsion at the dark, smelly staterooms crowded with travelers who hadn't bathed for weeks, much less the unpalatable conditions in the dining room.
 Henriksen, 196.
- 14) 滝川, 211.
- 15) Henriksen, 121-23.
- 16) Henriksen, 89. 91. 111.

- 17) Henriksen, 90.
- 18) Henriksen, 113-115.
- 19) *Red Ribbon on a White Horse*, 112.

“The Miracle” : What Sara Found in the New World

Masae UGAWA

Faculty of College of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1998)

Jewish American writers' novels have been popular recently; however, Anzia Yeziarska is hardly known to Japanese readers. One of her short stories “The Miracle” is dealt with here to give some information on this woman writer.

The story is told by the heroine Sara, and is set both in Poland, the Old World, and the United States, the New World. It is rather simple and common, as concerns the surface theme and the main plot. Although some defects are found in the text, it has power to fascinate readers and makes them sympathize with the heroine.

This essay shows how to read and estimate this short story. The writer's Jewish background and her own experience give us hints on reading it.